

E12. 学生の自立的自発的学習活動を支援する教育環境施設

同志社大学 今出川キャンパス 良心館



西側外観



中央門からサンクタスコートを望む

日本最大級の規模を誇る「良心館ラーニング・commons」を有する複合建物。新しい教育への対応と安全で快適な施設を目指す。

■同志社大学の新しい教育体制の出発を象徴

文系学部の新出川統合を機に、従来の「今出川・室町・新町」キャンパスに加えて、烏丸キャンパスを拡張整備し、今出川キャンパスには「良心館」を整備した。

教室、経済学部・経済学研究科の研究室・共同研究室、ラウンジ、食堂、購買、今出川キャンパス教務センター等が入居した複合施設で、建物中央部の2階から3階にかけて日本の大学では最大級のラーニング・commonsを設け、また、4階全フロアが小教室と演習室になっている。

なお、本建物の計画敷地は、キャンパスの北側に位置しているため、西門から正門につながるパーパスロードとの間にサンクタスコート（芝生広場）を計画することで、歴史と伝統を継承した施設群との一体的な利用に考慮した整備となっている。

■推進体制の整備

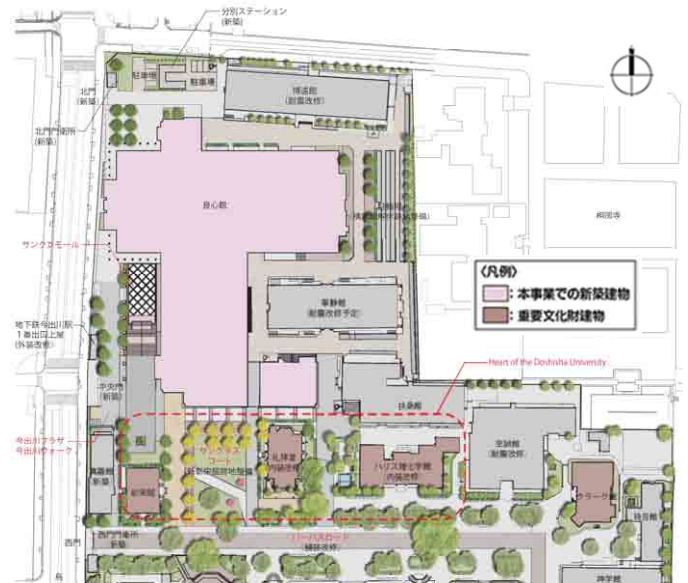
常務企画会議のもとに設置した企画施設会議において、学生の自立的自発的な学修を支援する教育研究空間の整備について検討され、常務企画会議において良心館を建設することが確認された。企画施設会議では施設全般に関するものを、ラーニング・commons具体化検討委員会ではラーニング・commonsに関するものを検討し、設計監理がそれぞれからヒアリングを行い、設計を進めた。

■新しい教育環境の拡充

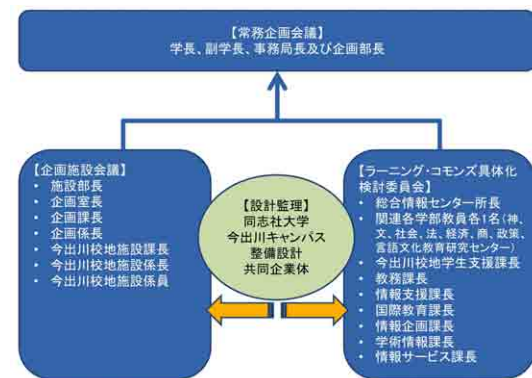
○ラーニング・commons

将来想定される教育研究の展開、学生の学びや活動での”動き”に着目したラーニング・commonsは、2階がクリエイティブ・commons、3階がリサーチ・commonsと位置づけ「学びの交流と相互啓発」、「アカデミックスキルの育成空間」のコンセプトで整備している。延べ床面積が2,500㎡超の広さを有しており、国内最大規模となっている。

2階のプレゼンテーションコートでは、何ができるのかではなく、何がしたいのかに合わせて多様な使い方ができるよう、プロジェクターやスクリーン、マイク、スピーカーなど、様々な設備を設置している。また、2階のインフォダイナーは、短焦点のプロジェクターと白板を設置したボックス席とし、壁に



施設配置図



推進体制図



クリエイティブ・commons

画像を映しながら、白板に書き込めるデジタル&アナログのボードを採用している。

さらに、2階のグローバルビレッジは、外国人留学生と日本人学生の出会いを生み出す空間となるよう日本語の利用が禁止され、リラックスした気分で交流が楽しめるよう、仕切りがなく通路に面したハイカウンターとしている。

そのほか、2階のグループワークエリアや3階のグループスタディールーム、ワークショップルーム、アカデミックサポートエリアでは、台形や四角い机、まが玉型の机などを組み合わせ、用途や人数に合わせた利用ができるよう配慮している。

ラーニング・commonsで使用するノートパソコンは、PCロッカーからIC学生証を使って借りることができる。

○ガラス張りの教室

教室と廊下の間仕切りはガラス張りとし、教育活動が見えることで、学生の学修意欲を刺激させ、自立的自発的な学修を促している。

また、少人数教育をサポートするゼミ演習室や小教室を充実させた施設となっている。

■問題解決型授業等における学習機会の提供

ラーニング・commonsが開設されたことにより、図書館と異なり多人数での問題解決型授業等に対応できるディスカッションの場が提供され、多くの学生が利用している。

■ゆとりある廊下とわかりやすい案内サイン

講義終了時の学生の集中等を考慮し、ゆとりある廊下幅としている。また、現在地を中心にした案内サインにより、利便性に配慮している。

■環境配慮への取組

省エネルギー設備の採用、地熱や雨水・井水の活用、自然採光・自然換気の促進など、自然が持つ快適性を積極的に利用し、環境に配慮した快適な居住環境を実現するため、省エネルギー化やCO2排出量削減などランニングコストの削減を図っている。

■全学共用オープンスペースを確保

○福利厚生ゾーンの充実

ラウンジ、食堂など、福利厚生ゾーンを充実し、誰もが利用できるスペースとして、地域にも開放している。1階ラウンジには、ベーカリーを併設し、学生の憩いの場となっている。

○ルーセントプラザ

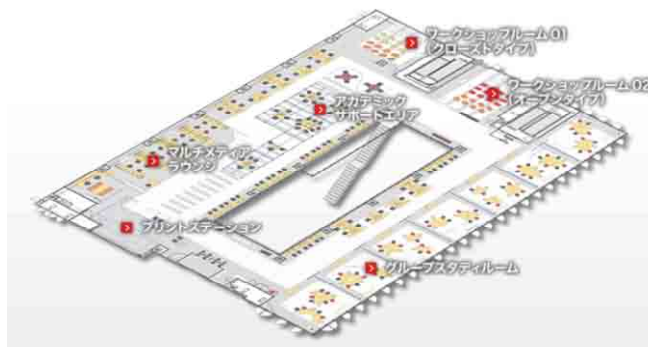
本建物の中央を南北に通る吹き抜け空間は、学生の主動線としてキャンパス内外の各方面からの出入りができ、ルーセントプラザに面して教務事務センターを配置している。

また、ラーニングcommonsに面する吹き抜け部からは、学生の活動を見ることができる。

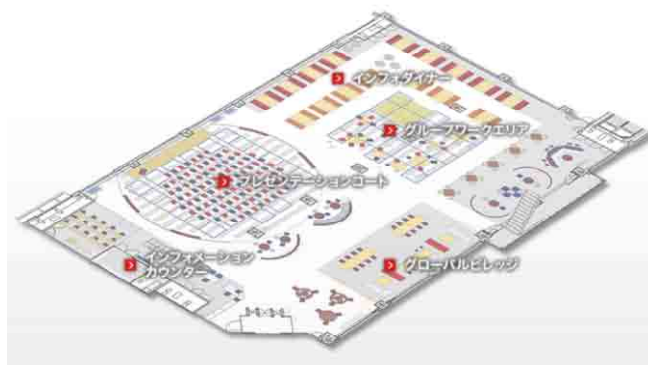
○交流を促すサンクンモール

地下1階には、食堂、コンビニ、本屋等があり、地上レベルから階段を下りた広場（サンクンモール）との一体的な利用により、学生等の交流を促す「たまり場」となっている。

また、学生の利便性と安全性を考慮し、地下鉄今出川駅連絡口を設置している。



3階リサーチ・commons



2階クリエイティブ・commons



2階プレゼンテーションコート



2階インフォダイナー



2階グループワークエリア



2階グローバルビレッジ



3階グループスタディールーム



3階ワークショップルーム



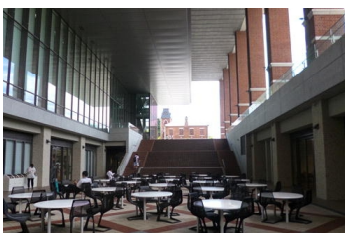
3階アカデミックサポートエリア



ガラス張りの教室



地下1階地下鉄連絡口



地下1階サンクンモール



1階ラウンジ



1階ルーセントプラザ

E13. 人・まち・地球に優しい持続可能な都市型建て替え施設

立命館大学 衣笠キャンパス 京都衣笠体育館



芝生広場と京都衣笠体育館



南東側外観

キャンパス再整備を展開するスペース確保のため、二つの体育館を統合整備。敷地狭あいの解消のために減築も実施。

■キャンパス再整備の端緒を開く

京都衣笠体育館（以下、新体育館）は、衣笠（きぬがさ）キャンパスにおける、教学・研究環境の改善と学生生活の向上に向けた一連の施設再整備計画の端緒を開くことを目的として建設された。施設の老朽化に加えて、建ぺい率が上限まで達する過密化が課題となっており、これらの課題を解消するため、まずは老朽化していた二つの体育館の統合・建て替えを実施し、第1体育館跡地を将来の建設可能用地として創出する計画である。

新体育館は、第1体育館、第2体育館の合計面積約6,900㎡から約9,400㎡に拡大するとともに、空調設備の設置や各種競技に応じたより高度な活動を可能とする施設環境を実現するなどにより、体育館の質的向上を図った。

■設計プロセスと推進体制

○企画・立案

2008年度に常任理事会のもとに衣笠キャンパス整備検討委員会を設置し、衣笠キャンパスの今後の施設整備について検討を重ねた。

2009年度第1回衣笠キャンパス整備検討委員会(2009.06.03)において、衣笠キャンパス再整備計画のシミュレーションとそれらの評価について報告された。それにより、新体育館を整備完了後、第1・第2体育館を解体する方向性が確認された。

○基本設計

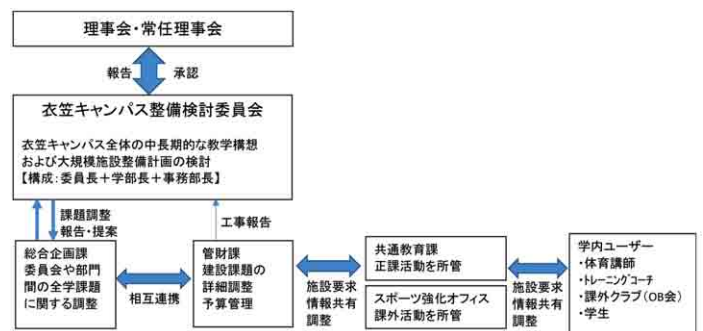
将来のキャンパス再整備を見据えた課題が多岐に亘ることに加え、難工事になることが予想されていたため、設計及び建設工事一括発注（設計・施工一括発注方式）を採用した。

○実施設計

正課・課外の担当課を主体として定例会議を開催。教員、体育会系課外クラブへのヒアリングを重ねながら、詳細の調整を行った。

■既存体育館のうち、必要な部分を残した減築計画

新体育館は、当初第2体育館を解体し新たに建てる計画も検討したが、工事期間中の正課・課外活動への影響を考慮し、ま



新体育館設計・建設段階の推進体制図



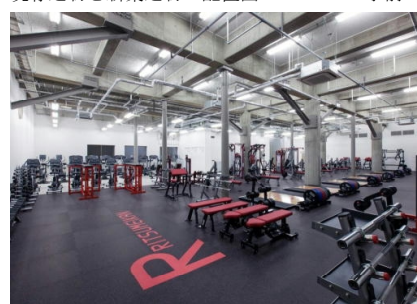
鳥瞰パース



既存建物と新築建物の配置図



手前：既存建物（減築後）



ボルダリングの練習場

減築棟地下に再整備したトレーニングルーム

ずは新築棟を先行して建設し、その後に第2体育館の減築・改修工事を行う2期工事計画とした。新築棟建設後、第1体育館を解体し、キャンパス再整備計画のための種地を確保した。

第1期新築棟建設によって、計画敷地の建ぺい率が超過するため、第2期工事では地上1階、地下1階建てであった第2体育館の地上部を解体・減築し、「憩いの広場」として再整備した。地下部分は、現行の耐震基準に準じた耐震補強を行い、トレーニングルーム、体育講義室、クラブボックスに改修し、隣接する新築棟と一体利用を図る計画とした。

■地域への配慮

地域住民との定期協議を開催（計画説明会8回、工事説明会24回、第2体育館跡地利用検討会2回）。特に、配置計画や減築棟（第2体育館）の跡地利用に関しては、防災拠点の整備や緑地の保全のほか、観光客の休憩場所や地域の子供の遊び場など、地域住民からの意見を踏まえながら計画検討を進めた。また、計画地は、第一種中高層住宅専用地域であるが、第一種低層住宅専用地域に隣接するため、隣接する部分の高さを抑えた計画とし、屋上緑化や屋外広場として地域へ開放する交流空間として整備した。

■快適性・利便性への配慮

動線上に、競技や練習中の様子が見通せる開口部を設け、活動の「見える化」を取り入れ、各競技場へは無線LANを整備した。スポーツ活動の安全対策として、競技場への空調導入や各フロアへの製氷機、ウォータークーラーを設置した。

■可変性の確保

地下第2アリーナは、大型スクリーンや調整室を設け、式典をはじめとする各種イベントにも対応できる計画としている。

■大学と地域の安心・安全を確保した周辺環境整備

新体育館は、衣笠キャンパスから公道を隔てた場所に位置しているため、地域の生活道路を通り抜けるという近隣との関係上の課題が存在した。新体育館には、1,000台規模の駐輪場が設けられていることに加え、入学式や卒業式など式典会場としての利用も想定しており、これらのアクセス課題を新体育館建設と同時に改善する必要があった。計画時に、京都市と協議を行い、衣笠キャンパスと計画地とを地下道で結ぶことについて了解を得ることができた。これにより地域の安全・安心の確保と、新体育館を利用する学生の利便性向上につなげた。

■環境への配慮

人・まち・地球のエネルギーを最大限生かすサステナブルなキャンパスづくりをキーワードに、以下の取組を行った。

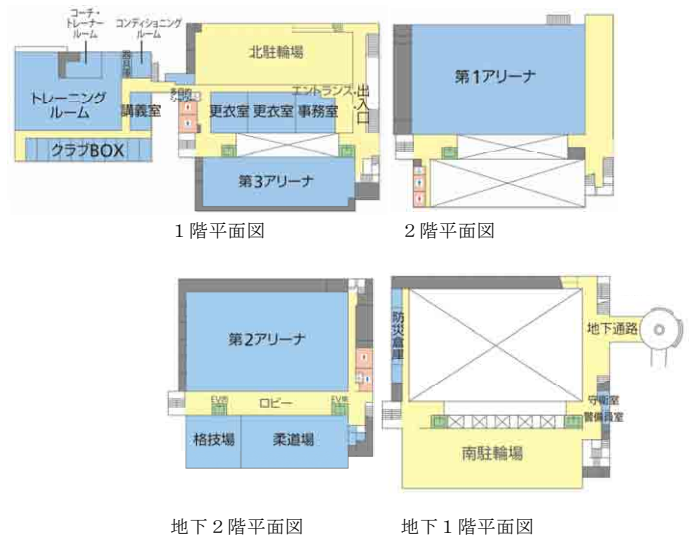
○風致景観の保全・地域との共生

計画地は、衣笠山の裾野に位置し、また、付近には世界遺産である龍安寺（りょうあんじ）を始め、古都京都の名刹に囲まれた立地にある。また、当該地は、京都市風致地区条例第5種地域（仁和寺・龍安寺周辺特別修景地域）に指定されている。設計に当たっては、こうした地域特性を考慮し、積極的な地下化を図ることで、周辺地域の環境になじむ建物とした。さらに、緑豊かな生活環境を形成するための植栽計画を行うとともに、屋根・軒の形状や色彩、建築材料など建築意匠に配慮した。

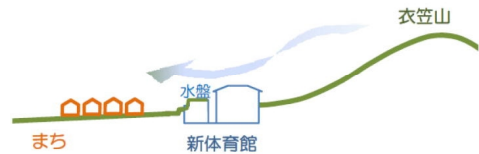
○景観と環境に配慮した計画

地下15mからなる地下体育館の快適な活動環境を確保するため、光庭を最下階まで設け、光と風を導く計画とした。

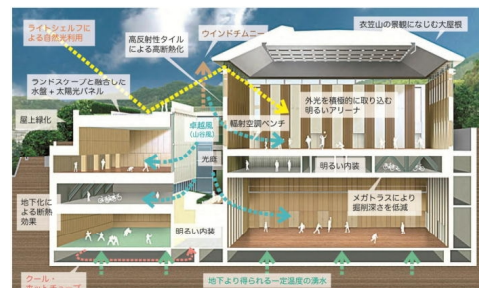
また、地下化に伴い、湧き出る湧水を省エネルギー化の積極策として、アリーナ休憩ベンチへのふく射熱空調に活用した。さらに、高温による発電効率が低下する太陽光発電パネルの表



地下通路と新体育館を望む



地域の景観特性に配慮した施設計画イメージ



人と地球のエネルギーを最大化する体育施設イメージ図（新築棟）

面に地下水を流し、冷却・汚れ防止による発電効率の向上のため、京都に伝わる「打ち水」のようにランドスケープと一体となった屋上溜水（かんすい）に利用した。

○環境への意識を高める工夫

衣笠キャンパスから、龍安寺へ通り抜けることができる通路を整備した。キャンパスから龍安寺につづく立体的散策路には、省エネルギーの取り組みを、風音・薫風・水音・波紋・季節の移ろいといった修景要素にちりばめ、省エネルギー技術が環境教育要素として「見える化」されるよう工夫を行った。

■施設整備の効果

本整備事業の実施により、以下の効果が期待される。

- ・体育館利用者数の増加
- ・トレーニングルーム利用者数の増加
- ・夏場の熱中症対策の緩和
- ・「憩いの広場」の整備により、学内利用者だけでなく、地域との接点となる空間の創出